

## 現代詩の部選評

詩人

### 水無田気流

今年の現代詩部門への応募作品数は七四一篇と、前回の八五二篇に比べて減少しましたが、本数以上に質的な変化が大きかったように思います。というのも、前回以上に応募動機が、「学校の課題」や「文芸部の創作活動で」といった集団単位のものよりも、「自分の創作力を試してみたくて」「今しかできないことをやってみたいくて」というような、個人的かつ強い意思から送られてきた作品が目立ったからです。

とくに、今年はこのコロナ禍で、いつもなら当たり前のようにあった学校行事や、部活動などのイベントも中止になり、高校生時代にしかできない、かけがえのない経験の一部もまた失われてしまったからでしょうか。この感染症は、本当に「人間の社会性に取り憑く病」で、私たちが集うことを阻害し依然収束に至ってはおりません。

このような状況下だからでしょうか。いつもなら散見する「変わらぬ日常への諦念」のような作品は減り、変わって「『普通』の日常への憧憬」を中軸に書かれた作品が目立ちました。

最優秀賞となった熊谷滋さん「尋常の季節」は、まさに表題の「尋常」な日常との距離感を

感じさせる作品でした。夏休みが来たことにも気づけないような、尋常ならざる日常を私たちは通ってきましたが、この「尋常」という言葉は、私見ではかつてはその通り「普通」の意味で使用されましたが、現代では「尋常ではない」のように、否定ごと組み合わせで使用されることが多い言葉のように思います。

普通を意味するのに、普通の否定で使用されるこの言葉を軸に、モノローグのようでいつの間にか読者との対話へ引き込んでいくような構成に、言葉の胆力を感じさせます。ゼロ年代の現代詩でよく見られたような、現実との距離感と浮遊感が醸され、バランスの良い絶望感（と、いうのが適切かは分かりませんが）が魅力的な作品です。

優秀賞となった岡田奈美さん「ある夏にこの観察」は、文字数をきちんと揃えて、水溶性で不定形に通り抜けていく「悲しみ」を、粹づけて切り抜いて見せる手法が活きています。最後の「髪を切っておいてよかった」と共鳴するように、とらえにくい感情をとらえておこうとする意図がかみ合い、形式と言葉の重さのバランスにセンスを感じさせます。

同じく優秀賞の飯野理奈子さん「あの瞬間の、藍。」は、題名に収斂されるように瞬間の一点を突き通す「藍」のリフレインが効果的な作品です。もう少し書き足したら、おそらく崩れてしまう危ういバランスを保持しながら、瞬間を書き切つて他を深く切り捨てた言葉の選び方が、詩の思い切りの良さに活かされています

ね。これ以上、足しても引いても成立しなかった作品だと思われまます。

今回は、最優秀と優秀作、それから佳作・入選作にもそれほど差はなく、嬉しい悲鳴を上げながらの選考となりました。強いて言えば、優秀作以上に上がって来た作品は、三本ほど「言葉を切り捨てる勇氣」の点で勝っていました。書く以上に、書かない勇氣の方がずっと大きい……というのは、つねづね感じますが、今回はとくにその影響力を感じました。

本年は、コロナウイルスの影響で受賞者のみなさまに贈賞式でお目にかかれず本当に残念ですが、本コンテストが少しでもみなさまの今後の創作活動の糧になるよう、願って止みません。

#### ●水無田気流（みなした・きりう）

昭和四十五年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院社会科学研究科博士後期課程単位取得満期退学。平成十四年から、水無田気流の筆名で思潮社の『現代詩手帖』に詩作品の投稿をはじめ、平成十五年に第41回現代詩手帖賞を受賞。平成十七年に『音速平和sonic peace』（思潮社）を出版、翌年に同作で第11回中原中也賞受賞。平成二十年、『Z境』で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、学術論文の執筆などを行うほか、評論に『シングルマザーの貧困』（光文社新書、平成26年）、『居場所のない男「時間」がない女』（日本経済新聞出版社、平成27年）等多数。平成二十五年度朝日新聞書評委員に就任。平成二十八年四月より國學院大學経済学部教授。